

めぐらしく曉の鐘が開こえて来た。その寺をやつと訪ねあてた日、その山門に、まこと幼稚園の名を見出して、縁を感じた。

若い住職である園長さんは、毎私曉、自ら力を籠めて鐘をつきつき終つた後、丘を降りて、その日の保育を開始すると語られた夏は満身汗ぐつしよりになり、冬の朝は重い撞木に手さきが凍るそうでもある。しかも、この激しい勤行を以て日々の保育を始められる佐々氏は幸福な幼稚園長である。幼児の無邪気に接する前に、先づ心を

梵鐘の余音に澄ませていられるのである。今の多くの保育者諸君の、慌しい朝の時間のなかにあつて、羨しいことである。

境内には、緋紅梅の古木もあり、艶を誇る牡丹園もあり、また、鐘樓の丘には、竹林を背景に、うべの繁茂がある。季節々々の風致、節をさそうに値する。しかし、足不精な筆者は散歩の途をこゝまで伸ばして

曉の鐘

倉橋生

色彩の楽しみを求め流に乏しい。たゞ朝な／＼枕に通う曉の鐘声は、つとめて聴きもたさないように心がけている。但し、梵鐘を聴く作法については、知るところも守るところもない。鐘の主も、それを必ずしも咎められないのであるうし、鐘声も亦、近く遠くその日の風の方向次第で同じでない。強いて聴かせようとしてもし如くに。

筆者は鐘の音が、すき……といつては足りない。旅の泊りなどで、その土地々々鐘を聞くのは、殊に趣きが深い。

祇園精舎の鐘の声は、無常感をさそうとうことだが、筆者の如き俗人は、つまらぬ煩惱(?)を静められ、しばし常の心に安定させられる。――

ところが世を挙げて常の心を見失わせた戦争が心なくも寺々の古鐘新鐘を、鏗つぶしてから久しい。

保育應答研究会

一、十一月十五日、十二月二十日

(いづれも第三土曜日)(午後一時半)

一、会場。フレイベル館講堂

来会随意。会費不要

一、講師。倉橋惣三先生

フレイベル館内

保育應答研究会係

幼児の教育 第五卷 第十二号

定価 金五十円

昭和二十七年十二月二十日発行

東京都中野区千光前町一〇

編集兼 倉橋惣三

発行所 東京都文京区大塚町三十五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田神保町二ノ四

株式会社 フレイベル館

振替口座東京一九六四〇番

所 フレイベル館宛願います

本誌御購読について注文申込その他はすべて發賣